<table>
<thead>
<tr>
<th>項目</th>
<th>内容</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>項目</td>
<td>手紙の作法：書儀の実践・應用</td>
</tr>
<tr>
<td>作者</td>
<td>山本 孝子</td>
</tr>
<tr>
<td>摘要</td>
<td>山本孝子：第12回若手研究者支援プログラム「漢字文化の受容—東アジア文化圏からみる手紙の表現と形式—」報告集</td>
</tr>
<tr>
<td>言語</td>
<td>日本語</td>
</tr>
<tr>
<td>出版物形式</td>
<td><a href="https://nwudir.lib.nara-w.ac.jp/dspace/">https://nwudir.lib.nara-w.ac.jp/dspace/</a></td>
</tr>
<tr>
<td>出版社</td>
<td>なら女子大学大学図書館</td>
</tr>
<tr>
<td>出版年</td>
<td>2017年</td>
</tr>
<tr>
<td>キーワード</td>
<td>手紙, 作法, 書儀, 実践, 應用, 漢字文化, 受容, 東アジア文化圏, 表現, 形式, 報告集</td>
</tr>
<tr>
<td>機能コード</td>
<td>10935/4561</td>
</tr>
</tbody>
</table>

このファイルはなら女子大学大学図書館のデジタル情報リポジトリからダウンロードされました。
手紙の作法——書儀の実践・應用

山本 孝子

はじめに

「書儀」とは、古代手紙を書く際の参考に供された模範文例集であり、手紙をどのように書けばよいか、文章の「さくほう」を示す。また、手紙は相手に対して失礼でないもの、礼にかなったものでなければならなかったため、封筒方法や料紙の選択、送り方など手紙に関わるさまざまな礼儀「さほう」も同時に収録している。当時の社会関係を背景にした言語規範および書儀の根りどころとしての役割を担い、手紙を書く人とそれを受け取る人の関係に応じた言葉遣い、儀礼的な手続き・形式を示すのである。

唐・五代期に生産が繰り返されていた書儀は、中華国内のみならず日本や朝鮮半島など周辺諸地域へも伝えられ、人びとは書儀を通じて日常生活で役立てるための技能・知識を身につけていた。現実で実際に手紙を書くための実用書として、あるいは漢文や書を学ぶための教材のひとつとして、さまざまな方法で受容され、実践・応用されていた。

本稿では東アジア漢字文化圏における書儀の普及・受容の実態を、當時當地における書儀の性質・役割に注意を払いつつ明らかにしたい。

一、書儀の流行

(一) 現存する書儀とその年代

史に書名のみ伝えられるものは少なくなく存在するが、いまわれわれが目にすることのできる書儀の大部分は敦煌から発見されたものであり、質・量ともに他を圧倒する。これららの写本書儀は、先行研究において大きく三つに分類されてきた。それぞれの特徴を簡単に紹介しておきたい。

---

1 本稿は、2016年8月21日に奈良県立万葉文化館で開催された奈良女子大学古代学術研究センター第12回若手研究者支援プログラム・奈良県立万葉文化館第15回夏期セミナー「漢字文化の受容——東アジア文化圏からみる手紙の表現と形式——」における講演をもとにまとめたものである。内容の多くは既発表の成果に基づくが、一般向けの解説とともに新たな見解や視点を加え、本プログラムのテーマに沿って再構成している。
2 各種目録に見られる書儀文献名については[王三慶2009]参照。
まずは『朋友書儀』である。唐・高宗期の宰相・許敬宗の作とされ、月ごとに順序立てて記されたものであって、友人間に交わされる二通一組の往復書簡の形態を備える。
現在確認できるこの形式の古例は、西晋・索靖の『月儀帖』に遡ることができる。
つぎに「吉凶書儀」であるが、敦煌写本中に約20種90点が確認できる。手紙の模範文例だけでなく、各種場面で必要となる礼儀作法をも盛り込み、記述が日常生活のあらゆる面に及んでいることから「総合書儀」とも称される。主に則天武后期から曹氏武義期(7-10世紀)にかけて広く流行したが、敦煌より時代遅れのものがトルファンからいくらか発見されていく。
最後は、昭武闘に盛んに編まれ、多くが敦煌輯武義期に地方で作成された「表狀箋啟書儀」である。吉凶書儀の中から公的な模範文、官人向けの模範文のみを集めたものと見なすことも可能であるが書訳はなく、歴代の図書目録において吉凶書儀が主に儀注類に分類されるのに対し、表狀箋啟書儀は別集類に収められる。吉凶書儀と表狀箋啟書儀、手紙の実物(特に草稿の類)の中には、いずれと見做すべきか、研究者の間で意見が異なる資料も存在するが、吉凶書儀の他と異なる特徴の一つとして、模範文を収録するだけでなく、凡例や本文に附された註解によって細やかな規定を示している点をあげることができる。
このほか、唐・五代期の書儀として現存するものに、『杜家立成機書要略』(唐・7世紀前半、正倉院・光明皇后親筆および市川橋遺跡出土木簡)、『要修科儀戒律抄』卷十五所収(道士吉凶儀井序)『唐代(『道藏』(HY643))、應』『五杉練若新學備用(五杉集)』巻中(五代・南唐)、駒澤大学図書館所蔵朝鮮刊本がある。
宋代以降の書儀としては、司馬光『書儀』がよく知られるところであり、その中には唐の『鄭儀』(S.6537vに前半部が残る鄭餘慶『大唐新定吉凶書儀』)、『裴儀』(裴矩・虞世南『大唐書儀』)、『後儀』(後岳の書儀)、『後儀』からの引用文も散見される。敦煌吉凶書儀においても同様であるが、時代の下る文献中には先行する書儀に対する言及があればしばしば見られ、新舊の相違点、書儀の変遷を、断片的であるもののはっきりと読み取ることができる。
また、(日本)国家図書館所蔵『新編婚禮備用月老新書』後集卷之一や(中国)国家図書館所蔵丁昇之『婚禮新編』巻一所収『書儀』に見られる婚禮に関わる各種書簡文もまた極めて重要な資料である。なお、書名あるいは書物の書名として「書儀」という名稱が用いられたことが確認できるものは、この12世紀以来の南宋で作成された『婚禮新編』が最後であり、その後は、手紙の文例を単独でを集める書物の代わりに、朱熹の冠婚葬祭マニュアルである『文公家禮』や『居家必用事類全集』、『新編事文類要誦簡青錢』といった日用類書、百科事典に手紙に関連する内容が収録されることとなる。
書儀はもともと中国儒教社会における伝統的な禮を反映するものであり、中国国内でさえも時代の変化や地域の特性、社会のニーズに応じて、徐々にその内容・スタイルを変えながら改編・生産が繰り返されていた。日本と朝鮮半島では、儒教文化の受容や内在的な発展・
文化形成の土壤は一様でなく、漢字以外の自国の文字を持った時期も異なる。中国や日本では書儀は扉に忘れ去られたにも関わらず、15世紀の朝鮮で『五杉練若新學備用（五杉集）』が重刊され実践されていたであろうことは3、中国の文化が周辺諸地域にいかに波及し、いかに受容されたかという問題を解明する上で、当地の社会・文化的背景に着目し歴史的展開を考えることの重要性を示している。

（二）書儀の普及

書儀が使用されていたことを直接的に導える記録がなく、現在も残されていない地域であっても、手紙の実例と書儀の内容との比較を通して、あるいは複数の手紙から見いだされる共通の特徴から、その背景には散佚してしまった書儀文書もしくは書儀の項目が存在していたことが見えてくる4。ここではクチャ・ドルドルオコル（Douldour-Áqour）遺跡発見の漢文手書文書を一例として、書儀の西方への伝播について見てみたい。

西域北道のほぼ中央に位置するクチャは、かつては亀茲国と呼ばれていたが、唐による征伐ののち、648年年に安西都護府が西州から遙か、唐の西域経営の據点となる。このとき、漢人統治者は漢字・漢語を用いたが、現地住民はブラフミー文字・クチャ語（トカラ語

<table>
<thead>
<tr>
<th>圖 1</th>
<th>図 2</th>
<th>図 3</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>D.A 6</td>
<td>D.A 76</td>
<td>D.A 135</td>
</tr>
<tr>
<td>(18×3.5cm)</td>
<td>(15.6×12.6cm)</td>
<td>(11.5×4cm)</td>
</tr>
</tbody>
</table>

3 駒澤大学図書館所蔵朝鮮刊本には利用者によるとと思われる書き込みが残されている。詳しくは[朴 2009]、[山本 2012b]参照。
4 委曲や「諺」の用法など書式の復元も試みてきた。[山本 2012a]、[山本 2015a] 参照。
B)を使っていたと考えられる。

ドルドルオオル遺跡からは、ベリオの 1907 年の発掘により漢語および呂語文献計 249
点が発掘されている。ほとんどの小さな断片であり、その中には書簡が含まれていないもの
の、3 点の封皮紙（手紙の包み紙）と 12 点の私信（必ずしも断定できないものを含む）を見い
出すことができる。特に封皮紙の実物は、数万点ある敦煌発見の文書にもわずか十点ほど
しか残されておらず、非常に貴重である。そこで、その外見的特徴と内容について、敦煌
発見のものと比較しながら、簡単に考察を加えたい。

まずは封本寫真と釋文を示す。
【D.A 6】(図 1)

釋文：
1  [謹] 上 [支慶] 姉夫閣下 □□[娘状][封]

【D.A 76】(図 2)

釋文：
1  __________________[騷?]子左[奔]兒状[封]

【D.A 135】(図 3)

釋文：
1  [謹 謹] [都護九郎?] 閣下________________

[Trombert2000]では D.A 6、D.A 76 をそれぞれ「Lettre privee(私信)」、「le document de l'
administration des relais(文書管理の中継ぎ)」であるとするが、敦煌寫本書簡と比較すれば
ここに記される内容が封題であることは明らかで、文字の左端の墨跡が紙の右端や中央部
に見え、もとは筒状に巻かれていた封皮紙であると判断できる。なお、D.A 135 について
は[Trombert2000]に「Enveloppe de lettre(手紙の封筒)」とある通りである。三點はいずれも
直封、つまり封皮紙の辺と手紙の辺が平行になるように置き、手紙本体を包み込む封筒方
法で用いられたものである。おおまかな形状は敦煌発見の封皮紙の実物と同じだが、いく

5 [高田 2009] 269 頁に「漢語は土地の人々のあいだにほとんど浸透していなかった可能性
が高い。クチャは唐の西域紡績の行政中心として、コーナンよりも重要な拠点であったは
ずであるが、クチャ人自身による漢字使用をなためる材料はほとんどない」との指摘があ
る。

6 ベリオに先立ち、大谷探検隊も當地にて漢文文書数十点を発掘しているが、書簡や私信
に関わる資料は含まれていないため、ここでは考察の対象として取り上げない。
なお、ベリオ所収文書の寫真や基本情報はすべて[Trombert2000]に収録されている。

7 D.A 6 の内容はほぼ完存している。D.A 76 は下半分、D.A 135 は上半分にしか残ってい
ないが、常套句・文字の配置などが敦煌寫本書簡に見える封題と一致する。

8 別に斜封という包み方も用いられていた。斜封とは、封皮紙の辺と書簡の辺が斜め 45 度
つか気付いた点をまとめておきたい。

D.A 6 の大きさについては、紙高が 18 cmと敦煌発見の封皮紙の二分の一ほどしかない。ただし、通常封皮の文字は天地いっぱいに記されているが、封題の内容はほぼ完全に残っており缺落がないことから、差しの過程で損なわれたものではなく、元来この大きさであったものと推測される。これまでに知られていた封皮紙に類例が多く、さまざまな状況において使用されたものか、クチャに特有の形式であるのかといった問題について、すぐに結論を出すことはできない。しかしながら、手紙を記した紙の折り方・包み方・手紙の文面・言葉遣いと同様に適るように書けねばならず、受取人との関係や時と場合に合わせて選択する必要があったことから、D.A 6 の伝信者で、「□□娘」と名乗る女性独自の特異な例ではなく、一定の範囲において共有されていたかたちであったにちがいない。

D.A 135 については文字の墨跡に従って復元すると明らかな通り、他の封皮紙とは巻かれていた方向が逆になっている。司馬光『書儀』巻一「私書・名紙」に「凡名紙、吉儀左巻、題於左掩之端爲陽面。凶儀右巻、題於右掩之端爲陰面（名紙については、吉儀の場合は左巻とし、右端が外側に来て陽面に封題を記す。凶儀の場合は右巻とし、右端が外側に来て陰面に封題を記す）」、同書巻五「喪儀一・吊歎篇幅」
「凡名紙、吉者左巻之題陽面、凶者反巻之陰面在左、陰面在右（名紙については、吉儀であれば左巻とし陽面に封題を記す。凶儀では逆に巻き、陽面が左に、陰面が右に来る）」とあるように、場合により巻く方向が使い分けられていた。写本の下半分が失われ

になるように置き、書簡を螺旋状にくるむ封経方法。その実例としてP.2555Pièce1が挙げられる。その方法は[赤木 2005]において復元がなされ、[王・王 2011]によって修正が試みられている。いずれも改善の余地があるように思われるが、現時点では代替案を提示することができないため、今後の課題としたい。

9 例えば、封皮紙の實物である S.11297は30.4×11 cmの大きさで、上下ほほ余白なく文字が配されており、これはまた書儀の插図とも一致する形式である。

10 紙が小さいことに関じてといえば、「短封」と呼ばれる形式が用いられていた。詳しくは[山本 2016]参照。

11 『五杉新学呂用』巻中「数書式様・短封様」で「陽面：某郡沙門 某 白疏。
ているため、言語表現から吉凶の区別をすることはできないが、封絵的方法に基づくならばこれは凶儀において吊りの手紙を包むためのものであったと考えられる。

書儀の中で封題の書き方、包み方など封絵の方法については、しばしば間解とともに詳しく説明がなされる。ここで紹介したドルドルオコル遺跡発見の封皮紙はいずれもその作法に従うものであり、みやこから遠く離れたクチャにおける書儀の普及・実践の一端を垣間見ることができる。

二、書儀の実践

(一) 手紙の表現——習得と活用

書儀に収録される模範文は、儀礼作法を重んじた堅苦しいものばかりでなく、日常生活の中で使用頻度の高い、普通の人びとのニーズに合ったものが収録されていた。その事実を示す材料を挙げつつ、手紙を書くために必要な言語表現がどのように挙げられ、実際に用いられていたのかを示したい。

書儀は初等教育の教材として使われていた。P2646『新集吉凶書儀』序文には、童蒙、つまり子どもや初学者にわかりやすいようにこの書儀を編んだことが述べられている。また、羽682vでは書儀から冬至のあいさつ文を書き写したものと、『開蒙要訓』、『太公家教』などの童蒙書の書名がともに記されている。子どもが書儀の例文を書き写し練習していたものと考えられる。P2622『吉凶書儀』には「李文義」「李文進」の書き込みが見える。このふたりはおそらく幼い兄弟で、この写本を教材として学習に勤んでいたにちがいない。この写本には裏面にも稚拙な文字が書き込まれ、動物の絵も描かれており、絵には「此是郎（狼）」「此是牛」「此是黄羊」などといった説明が加えられる。おおまかについては同音の文字に書き間違えてしまう。教科書として使っていた書儀の資料を利用して、兄が絵を描き、弟が勉強を教えていたのであろう。このほかにも「学郎」が記した「題記」が残っている写本も少なくなく、学生たちが書儀を教材として学んでいたことがうかがえる。Dx.01698の場合は①「侯侍郎直諫表」、②「謝酒飯状」、③「賀冬」の三つの内容を含み、すべて書儀の範疇に入るものであるが、成立過程などを考慮すると①と②、③は全く異質のものであり、組織的に編纂され流通していた書儀というよりも、備忘録としてあるのを他の目的で個人的に書写し利用されていたものと考えられる。

つきに、実際に書儀を使って手紙を書いていた事実を示す資料を取り上げていきたい。
64TAM24:30「趙義深與阿婆書」(唐)冒頭には

陰面：諱諱上　至孝大德」とあり、同4・P2622と一致していることから、吉儀・凶儀の別は名紙に限らず他の書式にも適応されていたものと考えられる。

12 Dx.01698について詳しくは[山本2008]参照。
書能悦、今二月仲春に、不審阿婆體[内]何如。

とり、「已暖甚暖」の部分が小字雙行になっている。本来「已暖」「甚暖」のいずれかを選擇すべきところを、書を見ながらそのまま書き写ってしまったために相違ない。現行の書儀と完全には一致しないが、例えば、「朋友書儀」であれば、「二月仲春」とのように示され、上旬・中旬・下旬とひと月を三等分し、その時どきに表現を変えることになっている。また、「委修科儀戒律鈔」「通啓儀第一」には、「右妻矩芸、今為表啓及書、皆云『孟春猶寒』。以後各依前件時節、十五日一改、亦隨事為之（右妻矩はいま表や話、私信では、みな「孟春猶寒」というのだとする。以降、各々時節にあわせて、十五日に一度改め、また用件にあわせて書くこと」と見え、P.3900「書儀（擬）」の前記著にも各月の時期の接摺について「十五日已前云…、十五日已後云…（十五日より前は…、十五日より後は…）」であり、半月に一度時間のあいさつを変える書儀もあったようで、64TAM24:30はトルファンに存在したこの種の系統の書儀を考察にして書かれたはずである。

語彙だけでなく、手紙一通すべて書き書した例もなく残っている。S.5713「惠賄等謝狀三通（假）」はP.3691『新集書儀』「謝外客到軍州供給」「謝下擔」「謝返賜物」三通を手本に抄出し、その際出人の呼称の部分に「惠賄等」と補入したものであり13、P.2646『新集吉凶書儀』「辞後失姊妹書」と P.3044「李文定書状」の関係も同様である。醉って記憶をなくし、翌朝書面で謝罪するという場面が想定されているが、このような状況は実際に少なくなかっただけかもしれない14。

羽 71「太太與阿耶、阿叔書」とは手式・内容から三つの部分に分けることができる（便宜上、A・B・C の番号を振った）。

01 A頌奉状、奉計合達、竟不蒙一問。季冬
02 極寒、伏惟
03 阿耶、阿叔尊體動止萬[福]。太太蒙恩駱
04 束（棟）。有限、侍奉未由、但增駱戀、無任下
05 情。謹因賀閨梨、阿伯師去次、謹奉狀
06 起居。不宣。謹狀。
07 十二月三日男僧太太狀上
08 阿耶、阿叔座前
09 B諭阿耶。宰宰阿兄、人云、失却。虛實、不得酌消息。
10 實若失却、阿那篤州郡失却分明、附一音信。

13 [張小豊 2007]18 頁
14 例えば『太平廣記』巻二七三「婦人四」には劉禹錫は蘇州へ赴任したとき、途中の揚州で刺史であった杜鴻漣に酒を飲まされ、記憶をなくすほどに酔っ払ったが、翌朝手紙を書いて謝罪したところ、許されたというエピソードが見える。
瓜州阿兄師與一書往至，發遣太太邊來。此聞於

官人邊諌訴。趁逐交易，太太逕 (?) 到。初春，乘衣 (?)

往看阿耶、阿叔、諸親來。願垂照察。C 諸阿耶、〔阿〕

叔。阿兄，先日太太諮量、兒子懸令迷腳 (却)、不聽今 (?) 受、

五花八散此有是處、審而思之。願重照察。

A 頻繁にお手紙をお送りしており、お受け取りいただいているはずだと思い

ますが、一度もお返事をいただいておりません。冬の終わり、非常に寒いです

が、お父さま、おじさまにおかれましてはご健勝のことと存じます。わた

しはおかげさまでつつがなく暮らしており、大変恐縮しております。事情が

あり、お仕えすることができず、思い慕う気持ちが増すばかりで、耐えがた

きことでございます。つっしんで、賀闊梨・阿伯師（太太の師のあに弟子）が

（そちに）向かうのにあわせて、お手紙をお送りいたします。（書面では）述

べ盡くすことはできません。つっしんでお便り申し上げます。十二月三日、

むすこである僧・太太がお手紙を奉ります。お父さま、おじさまへ。

B お父さまにおたずねいたします。卒宰お兄さまについては、ひとが言いま

すには、行方がわかりなくなっているようです。それが真実であるかどうか

については、情報をぐみ取ることができません。もし此州制で失踪した

のか、失踪したことがはっきりとしているならば、ひととお知らせくださ

い。瓜州の阿師師（太太のあに弟子）が手紙を通送りくださり、太太のと

ころまで届きました。このごろ、（そのことに関して）官人のところへ意見を

求めて訴えました。交易に便乗して、太太は急いで駆けつけるつもりです (?)。

春の初めには（お土産に）衣服を乗せて (?) お父さま、おじさま、親戚のみな

に会いに行きます。どうかご意見をお聞かせくださいよお願いいた

します。

C お父さま、おじさまにおたずねいたします。お兄さまのことにつきまして

は、先日太太は（お父さま、おじさまに）ご相談いたしましたが、子どもたち

もみな混乱してしまっており、（とまりく状況は）……することを可能とせ

ず、（家族は）バラバラになった外です。これ（相談した内容、この手

紙で尋ねられている）は大切なことですので、細かいところまでこのことに

についてしっかりとお考えください。どうかご意見をお聞かせくださいますよ

うお願いいたします。

A の部分はほとんど書儀からそのまま書き留しただけの内容であり定型表現が並ぶ。

B・C 部分がいま差出人・太太が受取人である父親とおじに伝えたい内容であり、当然の
ことならこの部分については書儀に手本がなく自ら自身のことばで書き綴っている。そのため10行目「阿那箇州郡」（どこの州郡）のような話しごとが混ざっている。本来ならば、すべて書き言葉、文語で礼儀にかなった表現を用いるべきところであるが、文字もそれほど上手くなく、まだ習いの僧侶であったのか、書儀に頼らなければしっかりとした文章を書くことが難しかったと思われる。書儀の有無により完成度に明かな差が出ており、このような人びとにとって必携の書として需要があったことは言うまでもない。

（二）手紙の形式

① 封緘印

再び手紙の形式について、封緘の際に使用する印を例に見ていきたい。

S.6537v『大唐新定吉凶書儀』「諸色箇表第五・封表極式」には次のように記される。

封表極式 題[表]極式

某道節度観察刺史陛（階）動封姓名簿、上中書省栄奏事。

右表書き（了）、即寍（裏）証（従後緊絞至頭、勿令心空）17、則著一色紙直封

題証、入函（[函]用黄楊木為之）。約（？）表紙数多少、遺之証。安表內（納）函

中、三道絞絞带上、則繋定。以白紙填之、火炙、刀子削平。當心書「全」字。

依此様封題証、則著一片蓋板、三重道絞絞、以防磨損。並両方館側一時入毬

袋、布裏封題発遣。

封表極式（表の最上級の封緘方法）

題[表]極式（表の題書の書き方）

（封題には）「某道節度観察刺史陛（階）動封姓名簿、中書省間にてまつりて

事を奏す」（と記す）。

右の表は書き終わったらすぐに包む［このとき手紙の末尾からきつく卷いて、

中心に空洞ができないようにすること］。同じ種類の紙を使い、直封にして

函に入れる［函はツゲの木で作る。］表が何紙から成っているのかを数えて

送ること18。表は函の中に納め、ヒモを三本かけて縛り、結び目は白い畳で

15 表現とは別に書証はしかるべきものを使っている。詳しくは[山本 2012a]、[山本 2015a]を参照。

16 手紙の材料や字體、紙格などの形式によって示される相手への敬意、禮儀作法については[山本 2015b]を参照。

17 原写本ではすべて同じ大きさの文字で書写されるが、この写本の体裁や内容から註釋であると判断した部分は[ ]内に示した。

18 書簡文で、同送する物品の数にについて細かく記されるのが一般的である。Dh.1458

「書儀（擬）」「遺物書」に「読解、議紙張数、二色縁寸、謹送上、惟備領。即當観展、
うめて、火で炙り、刀で削って表面を平らにする。真ん中には「全」という字を書く。このように封をし終えたら、蓋となる板をつけて、もう一度三本のヒモで縫り、すり切れるのを防ぐ。四方館の螺と合わせて毛氈の袋に入れ、布で封題を包んで発送する。

これとよく似た封緘方法が日本でも行われていた。『儀式』「飛駿儀」に次のように記されている。

非公開

図5
落戸遺跡出土「封」字石印

……、令主鈐納函函封書（A）写本に、証即令内記一人、於函上頭、記「賜某國」字、押緘之處「封」字、其緘下右注「飛駿」字、……
……、主鈐にハコに納め封緘させ終わったら（木のハコに納め、絹で閉じ、松脂を使って封じる）、内記一人にハコの上のあたりに「賜某國」の文字を記し、封じ目には「封」字を記し、その封じ目の下部右方には「飛駿」の文字を書き、……

螺ではなく松脂を用いているなど多少の相違はあるものの、木製のハコに納められ、絹で封緘される点は敦煌の書儀の記述と同じである。S.6537v『大唐新定吉凶書儀』では、封じ目には「全」字が書かれていたが（「當心書全字」）、ここでは替わって「封」字を書くように示される。このように文献に記録が残るほか、落戸遺跡（奈良時代）から出土した石製の「封」字印により、日本における「封」字封緘印の使用が裏付けられる。中国では宋末に「封」「封全」字印に関する記録があり、「封」字玉印、「封全」銅印も現存している。奈良・平安期の日本において用いられたこの「封」字印は、唐からの影響が十分に想定され、宋代の「封」「封全」字印も唐末からそのまま踏襲されたものであることを仮定しようと考える。このように文献資料・考古学資料が示す通り、書儀に規定された形式は時間・空間を超えて実践・應用されていたのである。

② 料紙

書儀では、手紙を記すために用いる材料や形態についても注意が向けられている。特に吊りの手紙については各書儀で言及がなされる。S.361『書儀鏡』「凡五十條」では

先状不宣、謹状」とあり、書簡の紙数についても同様に明記されたことがあると思われ

19 さらに、この後の記述からは、「囊」の使用も確認できる。
20 [奈良県橿原考古学研究所 1999]に拝れば、この印は流連岩製で、重量 34.12g、印面はタテ 2.8 cm×ヨコ 2.4 cm、高さは 3.1 cmで、朱や有機質の遺存は確認されていないとのことである。
21 「全」字印の機能、ハコを用いた封緘方法について詳しくは[山本 2013]を参照。
凡修吊書、皆須以白藤紙楷書。
呪いの手紙をしたためる場合、すべて白い藤紙に楷書を用いる。

とあり、P.3849『新定書儀譜』にも
凡凶書、無間尊卑、皆用白藤紙楷書、重亡者也。如無藤紙、自凜亦通。
凶書を尊卑を問わず、すべて白い藤紙に楷書を用いることで、亡くなった者を重んじる。もし藤紙がなければ、箋書きの紙でも通用する
と、その他の書儀でも同様の凡例が見られる。呪いの手紙は尊卑を問わずすべて白い藤紙に楷書するよう指示がある。ただ、もし藤紙が手に入らない場合は箋書きの紙で代用しても差し支えなかったようで、材質よりも色が「白」であることが重要であったらしい。
藤紙は南方、現在の紀州の産地で22、入手しにくかったことに依るのか、西西地方で編まれたP.2622『古凶書儀』では
右修吊答疏…所修疏並無好紙楷書。
右吊答の手紙を記す際には…手紙を記す場合にはみな「好紙」に楷書を用いるように。

のように「藤紙」ではなく「好紙」とだけ指定されており24、色についても言及がない。

22 白い藤紙はまた皇帝の敬する詔にも使われていたようである。唐・李肇『翰林志』「凡詔書、徵召、告示、處分日詔、用白藤紙。凡默示用黄麻紙並印。凡批答表疏不用印。凡太清宮諸殿功勲記文、用青藤紙。…」
23 『新唐書』「地理志」「杭州餘杭郡上土貢。白編絹、絳絹、藤紙、木瓜、橘、蜜蠟、乾薬、芯、牛膝。」；陸羽『茶経』四之器「紙囊：紙囊以刻（刻や紙は現在の浙江省に置かれていた）藤紙白厚者為之。以貯所煎茶、使不泄其香也。」
24 「好紙」とはどのような紙をいうのか具体的にはっきりとはわからないものの、宋人の記録にも残っている。王鈐「王氏談録」「書儀」には、「公言。唐裴興二家書儀皆云凶書須好紙繕寫、言語哀雅。稽之似非寧信之義、不若以生紙書之、語言字體質朴為稱」と、
裴氏の書儀と鄭氏の書儀ではどちらも凶書は好紙を用いて書き記すよう指示があり、その哀悼の表現は規範となるようなものであったものの、よく見てみると悲しみ悼む意は似て非なるものであり、生紙に質朴な言葉や筆遣いで哀悼の意を示すに及ばないのだという。
また、『宋氏聞見後録』巻二十八には「唐人有熟紙、有生紙。熟紙所謂妍妙輝光者、其法不一。生紙非有喪故不用」と見え、唐代には熟紙と生紙の二種類があったことがわかる。
熟紙は質的良い光沢のあるものであったがその製法はさまざまなであり、生紙については誰が亡くなった時以外には用いなかったらしい。加工紙であった「熟紙」に対して「生紙」というものがあったこと、鄭餘慶の書儀(すなわち S.6537v 『大唐新定吉凶書儀』の現存しない箇所)に、「生紙」ではなく「好紙」を用いるよう示されていたという点から推測するならば、「好紙」は何らかの加工が施された紙であり、おそらく「白藤紙」に代えて用いるような場合には染色加工が施された紙であったと思われる。
料紙の選択におけるこのような地域差については、書儀の利用者に判断を委ねて使用されたのではなく、書儀の編者が当時の地元の状況に見合った方法を提示している。

封皮紙の売主からもまた料紙の選択と書儀について別の側面が見えてくる。書儀には示されていないものの、手紙本文の余白や裏面25、あるいは備紙を利用して宛先などの情報が示されているのである。S.361『書儀編』『四海書類・重書』には次のようにならっており

諫諫上　位公閣下　行官位姓名状上封」と封題を書いた上から更に重ねて包み、その紙には「官位姓名状至所、去皮送付文」と記す。「官位姓名状」は差出人を示し、「ム所」とは受取人に手紙の取り次ぎを行うところを指すが、その取り次ぎ場所で外側の封皮紙（つまり「官位姓名状至所、皮送付文」と記した紙）を剥がして、受取人である「ム」に届けてほしいというのである。《五杉漸若新学備考》巻中「小師上和尚」にも「若路遠、即要兩封、題寄去處。寺院有兄弟、即遠兄弟處、請轉通呈」と見え、差出人である小師から遠く離れたところに受取人の和尚がいる場合、封題の外側にもう一度封筆で包み、送り先を書き記すのだという。また、寺院に在る場所については、直接和尚に送るのではなく、まず兄弟に宛てて和尚に手渡してもらうようである。同書「上尊人閲遠書」でも「與尊人書、須置外斜封題云『附至某處』、云『去外封通上某官書簡任所　某　重封』」と同様の説明がある。ここから、目上の人物への手紙は直接その手元に送るべきではなかったこと、おそらく斜封は重封する際の外側に用いられ、受取人の手に渡る前に剥がされていたことがわかる。S.6537v『大唐新定吉凶書儀』「題[表]極式」に「依此様封題訳、則著著片蓋板、重三道縫之、以防磨損(このように封をし終えたら、蓋となる板をつけて、もう一度三本のヒモで縫い、すり切れるのを防ぐ)」（板で挟むことによる重封）、同書題『対陳起居第六』に「最好封了、則以一張紙裏、以防損污(封をして終了したらもう一枚の紙でくるみ、汚染を防ぐのが最も好ましい)」（おそらく《王・王 2011》に指摘されるように斜封による重封）と考えるように、運搬途中での汚損を防ぎ、きれいな状態で受取人に届けることが重要であったのだろう。斜封の用紙は受取人目には触れないのでP.2555 Piecel の封題が「姫居義兵馬留後書至甘州涼州已来送上」26と、姫から叔への手紙にも関わらず「[差出人] 書至 [受取人]」という目上から目下への手紙の封題の書式や二次利用の紙が用いられていることも矛盾がない。本文の書かれた紙を保護し、中身の読みを防ぐと同時に、外見の美しさを保った状態で相手の手に届けるという

25 《王・王 2011》にいうところの「隠紙倒封」である。羽172 / 2、S.4685 など、[坂尻 2012a]、[坂尻 2012b]参照。但し、背面に封題を記した上で「重封」されていた可能性を完全に否定することもできない。
26 文字の読みは[赤木 2005]を参照した。
役割を包み紙は持っていたのである。当然、書儀が紙の二次利用を促すようなことはないが、利用者は書儀の意図を汲み、可能な範囲内で禮を盡くしたひとつの應用例と言えるだろう。

補節：手紙の形態と書写姿勢27

さきにドルドルオコル遺跡の封皮紙を取り上げた際に、手紙は折り疎むのではなく巻くものであることについて少し触れた。また、ハコに入れる場合にも巻いた状態で納められ相手に届けられていた28。現存する封皮紙を実寸大の複製を用いて復元するとわかるが、かなり細くしっかりと巻かれていたことがわかる。現代の感覚からすると、細い筒状の紙に

図 6
榆林窟第 19 窟
甬道北壁（部分）（五代）

図 7
1919.0101.0.170（大英博物館蔵）
北方神星・計都星像護符（五代）（部分）

図 8
1919.0101.0.157（大英博物館蔵）
苻受洛書傳説図（唐代）（部分）


28 敦煌に残された手紙の実物を数計すると、いずれもおおよそ 2.5-3.5 cmほどの幅で折り重が残っているが、これは筒状に巻かれた紙が押しつぶされたときのものであると考えられる。[赤木 2005]では、斜封の包み紙である P.2555 Pięc1 に残された朱印が筒状に巻いた状態でなければ捺せないものであることが指摘されている。また、丁昇之『婚禮新編』卷之一「書儀」に見える封節方法を示した図（図 10）も参照。
封題を書き記すことは容易でなかったように思われる。しかし、確かにこのような封皮紙が日常的に用いられていたのである。本題から逸れるが、ここでは書儀が流行していた唐・五代期の書寫姿勢について談して見ておきたい。

図6は棟林窟第19窟甬道北壁に描かれた目連守孝図の一部である。父母の墓の前に腰を下ろし、右手に筆を持つ目連の姿が確認できる。左手にある書寫媒体が紙であるかどうか、その材質までははっきりとしないが、細長い形状をしている。図7、8は敦煌莫高窟発見の紙本彩色絵である。図7には、右手に筆、左手に冊子を持ち立っている女性が描かれており、図8では官人が立ち姿で筆を使って笏に記録する様子がうかがえる29。一方で、唐五代期にはすでに主要な書寫媒体は竹簡・木簡から紙へと移行しており、しややなどの豪に紙を置いて書写する場合も少なくなく30、このような姿勢は十王經を描いた彩色絵に顕見される（図9）。ただ、封皮紙のように巻いた状態の紙は不安定で、左手で握り支える必要があり、やはり置いて書くには適さない形状である。

29 図7、8の基本的な情報はIDPに挙った。
30 [孫 2015]に倣れば、隋唐の頃から尺や案の上で書写し始めたが普及はしておらず、執筆法や家具の変化に伴い、紙を置くことが主流となるのは宋代のことだという。 [馬場2014]250頁表2では書寫媒体の扱いについて「持つ」から「置く」への移行期を400年代から500年代にかけての二百年間と想定し、238頁では「隋・唐時代に至ると、家具のしつらえにも大きな変化が生じ、いすに座って機に向かって文字を書くようになり…宋代に至るとすべて機に書寫媒体を置いて文字を書く」との指摘があるが、敦煌の図像資料などを見る限り、「持つ」と「置く」が併用された期間はもう少し遡るまで續いており、宋代に至っても「すべて」とは言い切ることはできないであろう。
宋代以後についても、「持つ」は「置く」に完全に取って代わられたのではなく、あくまで主流が移行したにすぎず、時と場合によっては「持つ」ことが行われた。丁寧に『婚禮新編』卷之一「書儀」に見える封緘方法を示した図（図10）では立體的に巻いた様子がうかがえる。宋代以降もこのような書寫技術は決して棄てられてはいなかったと考えられる。直封であれば、おおよその見当をつけて文字を塗抶してから巻くことも可能であったかもしれないと、斜封は巻いた状態でなければ封題を描くことはできない31。「九曜星圖像」（MOA 美術館所蔵、東寺旧蔵。長福二年（1164）三月十一日持之）の奥書ありに描かれる「水曜」像は右手に筆、左手に端を巻いた状態の紙を持つ。宋を模したものと考えられており、唐代以降も仏や書などの家具を使用せず、書寫機器を左手に持つ伝統は途絶えていなかったことがうかがえる。

日本の状況について、『儀式』「飛驒儀」で文字が記されるのは木製のハコであり、管見の限り書儀に対応する封皮紙の実物は残されていないが、MOA 美術館所蔵「九曜星圖像」のような図像から、少なくとも古来の日本人がこの図像を通じて天の書寫姿勢を認識していたと考えられる。「信貴山縁起」には紙を左手に持つ状態で文字を書く様子が見える（図11）33。参考までに紹介しておくと、カラシャール・ミンウイ（Mingoi）遺跡の壁書（8-9世紀）にも左手に書寫機器を持つ人物が描かれている。また、朝鮮半島においても、時代はかなり遙かに、高句麗・安岳3号墳の西室室壁

31『五箇織若新學備用』「上尊人闇遠書」に「風尊人書、須置外斜封題云『附至某處』、云『去外封通上尊人書書書底事両書 重封』」とあり、少なくとも五代期にも斜封は用いられていた。
32『箱根美術館・熱海美術館名品図録』（第二集、熱海：世界教世教、1972）所収編版および図版解説参照。
33『高野大師橿崎書証』に見える「執筆図」は手首から先しか描かれていないが、[孫 2015]「空海和尚の執筆図」（245-248頁）において机を使用していなかったことが論議される。これもまた書儀流行の時代の日本人の書寫姿勢を反映するひとつの資料として挙げることができよう。
に描かれた墓主肖像画の中で墓主の左に立つ人物は、右手に筆、左手に札状のものを持ており、右肩に上方には朱で「記室」の文字が記されている。

このように書儀が普及していた当時の中国や日本では、立位・座位に関わらず、右手に筆を、左手に書寫媒介を持って文字を書くことは普通に行われていたことがうかがえる。手紙の本文を書いた紙を巻き、さらに封皮紙で包み、その上に封題を書き記すことは特別な技術を要するようなものでなかった。書儀を通して表面的に書札職を受容していたのではなく、文字文化の基盤においてこのような共有する部分があったからこそ、実践的運用が可能であったと考えられるのである。

むすびにかえて

東アジア漢字文化圏においては、「漢字」という共通の文字を媒介として、中国からさまざまな制度や文化を取り入れてきた。書儀の受容もまたその一例であり、手紙のさほう・さくほうにも時代・地域を超えた制度・文化の連続性を確認することができた。

電話もメールもなかった時代において、手紙は通信手段として主要な役割を果たしていた。また、人間関係を円滑に保つためにも欠かすことのできないものとして、日常生活の中で実質的な役割を担っていた。季節のあいさつ、提訴の手紙、通絡書、招待状などは儀礼作法に基づく書式や字醸、言葉遣いが重んじられる。差出人は受取人との尊卑長幼上下親疎に基づき、書儀に示される模範文を真似、定型表現を「さくほうしょ」である書儀か
参考文献（アルファベット順）

馬場基
2014：「書寫技術の傳播と日本文字文化の基層」角谷常子編『東アジア木簡学のために』東京：汲古書院，227-250 頁

Éric Trombert, avec la collaboration de Ikeda On et Zhang Guangda

馬怡
2013：「中國古代書寫方式探源」『文史』2013 年第 3 輯，147-189 頁

朴鍾辰
2009：「應之的（五杉達男新學備用）編纂とその佛教史的意義」『印度學佛教學研究』第 57 卷第 2 號，51-57 頁

坂尻彰宏
2012a：「大英博物館蔵甲戌年四月沙州妻邵慶連致肅州僧李保祐狀」『敦煌寫本研究年報』第 6 號，155-167 頁

2012b：「杏雨書屋藏敦煌秘笈所收懸泉索什子致沙州阿耶狀」『杏雨』15，374-389 頁

孫曉雲
2015：『書に法あり』東京：中央公論美術出版

高田時雄
2009：「シルクロード漢字文化の東西」高田時雄編『漢字文化三千年』京都：臨川書店，185-220 頁

王三慶
2009：「敦煌書儀文獻と東アジア文化」高田時雄編『漢字文化三千年』京都：臨川書店，185-220 頁

王建礫・王建璋
2011：「敦煌所出唐宋書札封緘方法的復原」『文獻』2011 年第 3 期，37-48 頁

山本孝子
2008：『侯侍郎直諫表』と書儀——Дх.01698 について』『敦煌寫本研究年報』第 2 號，
2012a：「書儀の普及と利用——内外族書儀と家書の関係を中心に」『敦煌寫本研究年報』第6号、169-191頁
2012b：「應之《五杉練若新學備用》卷中所收錄的書儀文獻初探——以其與敦煌寫本書儀比較為中心」『敦煌學輯刊』2012年第4期、50-59頁
2015a：「敦煌發見の書簡文に見える『啃』——羽071『太太與阿耶、阿叔書』の文書に關聯して」『敦煌寫本研究年報』9号、93-109頁
2015b：「唐五代時期書信的物質形態与禮儀」『敦煌学』第31輯、1-10頁
2016：「図儀における「短封」の使用——唐・五代期における書簡文の変遷」『敦煌写本研究年報』第10号、109-123頁

張小豊
2007：『敦煌書儀語言研究』北京：商务印书馆

莊天明
2014：『執筆的流變——中國歷代執筆圖像匯考』南京：江蘇鳳凰教育出版社

插圖出典

圖1、圖2、圖3：[Trombert2000]

圖4、圖7、圖8、圖9、圖12：International Dunhuang Project（http://idp.bl.uk/）

圖5：『奈良県遺跡調査概報1998年度』第二分冊、樞原：奈良県樞原考古學研究所 1999，PL.2

圖6：敦煌研究院（http://public.dha.ac.cn/content.aspx?id=517474937224。最終閲覧日：2016年12月12日）

圖10：任繼愈主編『中國國家圖書館古籍珍品圖錄』北京：北京圖書館出版社，1999


圖13：東北アジア歴史ネット（http://contents.nahf.or.kr/japanese/item/mapViewer.do?levelId=kk_003c_0040_0020_0010&gisX=&gisY=。最終閲覧日：2016年12月12日）

（やまもとたかこ・京都大学非常勤講師）